

多くのグループは「4点杖での安定した歩行」「安定した立ち上がり」などの抽象的なゴールを立てるにとどまった。上記目標の達成期間(3ヶ月)を明示したグループもあったが、比較的中期的な内容で、より短期的・段階的な中間目標を提示できたグループはわずかだった。「安定した」という定義があいまいなため、1ヵ月半後の仮想状態について、目標達成したかどうかの判断がグループ内で一致させることができないグループが多かった。このことは、デイケアなどの施設で提供されるサービスにおいては、サービス提供者が複数同時に存在することで、現場での合意形成が作りやすい場合はいいが、訪問介護事業所のように介護の現場ではヘルパーなりケアマネージャーなりが単独で判断しなくてはならない場合に顕著な問題となって顕れることが予想された。すなわちどこまで目標・手段などを「共有できるのか」が大きな問題であり、そのためになにを具体的にケアプランに含むべきかが重要であることを浮き彫りにした。

目標が明確でないために、目標到達のためのサービス提供内容については、「歩行時の見守り・声かけを行う」などのジャルゴンしか用いることができず、抽象的・漠然としたプランしか出せないグループも存在した。

支援事業者の間では、サービス事業所が提供しているサービスの内容や、特定のサービス事業所の能力・資源で実際に提供できるサービスの質・レベルを詳細に把握できていないものもあり、目標に到達するための具体的なプロセス

をプランの中に明示できていないものが多かった。あいまいな目標とサービス実態の把握不足があいまって、提供されるサービスがぼらつくことが懸念された。

目標に到達するための過程は複数存在するはずであり、理論的に最適なものでもサービス事業所のサービス能力・人手などを考慮して実行可能性が低ければ、むしろ回り道になっても着実にこなせるプランが求められるであろう。実行可能性も加味しながら、要介護高齢者の希望・目標と現場の力量の双方を満たせる具体的なプラン内容をケアマネージャーが提示できるのかが問題とされた。各サービスをどの期間・どの程度、どのような実施方法で誰が、どのタイミングで(たとえば「立ち上がり時見守り」といっても、ベッドからのときなのか、いすからなのか、トイレのときかなどのタイミングを明確にしないと、すべて介助して却って機能を廃用しかねない)行われるのかははっきりさせてサービス事業所に渡すことが理想形である一方、現状の支援事業所ケアマネージャーの力量とのギャップが浮き彫りにされた。ほかにも、残存機能を生かすために「歩かせる」とことと、転倒リスクを避けたいデイケア事業所に、どこまで「歩かせるリスク」を許容させられるのか、などプランの理念と実施のジレンマなども明らかにされた。

2) 実態調査

3月3日現在、1,425名から回答が回収された。現在結果の入力が終了し、データクリーニング中である。これを認定情報と組み合わせて、認

定介護度・その他要介護高齢者属性ごとに、介護者の負担・インフォーマルケアとの関連、保険外出費の実態などを明らかにしていく予定である。

D. 考察

2003年11月にケアプランの自己点検指示が出され、ケアプラン作成や評価の標準化作業が強く求められるようになった。さらに介護予防の導入と、国際生活機能分類を意識した目標管理型のケアプラン作成が求められるようになり、これまで以上に支援事業所のケアマネージャーに、具体的かつ評価可能な目標作成と評価・管理が要求されている。国際生活機能分類の概念や介護予防について、さまざまな情報提供がなされる一方、具体的なアセスメントのノウハウについては、依然として現場の支援事業所ケアマネージャーの間で技能・知識に大きな格差が見られている。ことにサービス事業所のサービス内容についての掌握が不十分であり、目標を評価可能な形までに「具体化」して煮詰められない現状が浮き彫りとなった。今後、新介護予防給付を展開するに際して、介護予防の狙いの啓蒙だけでなく、目標管理の手法論としてのマネジメントサイクルの概念導入

やトレーニングなど、より具体的に「どうすればいいのか」に答えた環境づくりが求められていると考えられた。またこうした事情をかんがみて、新サービスの開発や報酬制度などの設計が求められると考えられた。これまでのように有形サービスの実施事実だけが評価・報酬されるのではなく、プランなどのプロセス、そして実際のアウトカムなどを評価・反映したパフォーマンススペースの報酬評価が必要と感じられた。

E. 結論

鹿児島県肝属郡5町において、介護支援事業所を対象に実証的なデータのフィードバックと、ケアプランの標準化によるケアプランの質向上のための啓蒙活動を実施した。今後活動をさらに進めて、介護予防を含めた質の高い介護支援活動を事業所ならびに保険者が共同で模索するモデルを画策していきたい。

F. 研究発表

未発表

G. 知的所有権の取得状況

該当なし

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
田宮菜奈子	第2章 POMSの介護・福祉分野での活用法	横山和仁	診断・指導に活かすPOMS活用事例集	金子書房	東京	2002	13-20
田宮菜奈子	第4章 症状の分類—現場で役立つ症状の捉え方	野中猛、奥山真紀子、田宮菜奈子	有斐閣、社会福祉基礎シリーズ第15巻、ソーシャルワーカーのための医学	有斐閣出版	東京	2002	151-178
田宮菜奈子	第6章 高齢者介護における性差	芦田みどり	ジェンダー医学	金芳堂	京都	2003	74-88
荒井由美子	介護負担—現状と対策—	柳澤信夫	老年期痴呆の克服をめざして	長寿科学振興財団	東京	2003	239-299
荒井由美子	公的介護保険の導入と介護者の介護負担に関する研究	柳澤信夫	健やかに老いるために2002	長寿科学振興財団	東京	2003	50-51
田宮菜奈子 林啓子	糖尿病患者支援における活用.	横山和仁	POMS短縮版手引と事例解説	金子書房	東京	2005	27-37
荒井由美子	在宅家族介護者の介護負担.	上島国利	精神障害の臨床	日本医師会	東京	2004	251-252
荒井由美子	家族介護者の介護負担.	武田雅俊	現代老年精神医療	永井書店	東京	2005	(印刷中)

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
<u>Tamiya N</u> , Yano E, Yamaoka K.	Use of home health services covered by new public long-term care insurance in Japan: impact of the presence and kinship of family caregivers.	Int. J Quality in Health Care	14(4)	295-303	2002
<u>Arai Y</u> , Zarit S, Sugiura M, Washio M.	Patterns of outcome of caregiving for the impaired elderly: a longitudinal study in rural Japan.	Ageing and Mental Health	6(1)	39-46	2002
<u>荒井由美子</u>	在宅介護における介護負担と介護負担がおよぼす影響	GPnet	49(8)	24-31	2002
<u>荒井由美子</u>	介護負担度の評価	総合リハビリテーション	30(11)	1005-1009	2002
<u>田宮菜奈子</u>	訪問看護サービスの役割と質の評価	教育と医学	51 (7)	59-65	2003
佐藤幹也, 橋本英樹, <u>田宮菜奈子</u> , 矢野栄二	介護報酬給付実績データウェアハウスの開発	医療情報	23 (6)	483-490	2004
<u>荒井由美子</u> , <u>田宮菜奈子</u> , 矢野栄二	Zarit介護負担尺度日本語版の短縮版(J-ZBI_8)の作成:その信頼性と妥当性に関する検討.	日本老年医学会雑誌	40(5)	471-477	2003
<u>Arai Y</u> , Ueda T	Paradox revisited: still no direct connection between hours of care and caregiver burden.	Int J Geriatr Psychiatry	18(2)	188-189	2003
<u>Arai Y</u> , Zarit SH, Kumamoto K, Takeda A	Are there inequities in the assessment of dementia under Japan's LTC insurance system?	Int J Geriatr Psychiatry	18	346-352	2003
<u>荒井由美子</u> , 熊本圭吾	高齢者リハビリテーションと介護.	老年精神医学雑誌	14(3)	367-375	2003

荒井由美子	介護負担についての調査研究の現状.	医事新報	4117	112-113	2003
荒井由美子, 工藤啓	Zarit介護負担尺度日本語版(J-ZBI)および短縮版(J-ZBI_8).	公衆衛生	68(2)	125-127	2004
田宮菜奈子, 他7名	地域保健福祉における本学会誌の役割	日本公衆衛生雑誌	50(9)	920-937	2003
西村真紀(生協浮間診療所), 大野毎子, 松村真司, 田宮菜奈子	女性は女性医師を受診したいと思っているのか～診察医師の性別希望について	性差と医療	2(2)	239-244	2005
佐藤幹也(帝京大学 医学部衛生学公衆衛生学講座)	在宅要介護者の通所介護サービス利用と介護施設入所リスク	帝京医学雑誌	27(5-6)	391-399	2004
荒井由美子	Zarit介護負担尺度日本語版(J-ZBI)および短縮版(J-ZBI_8).	日本臨床	62(4)	45-50	2004
荒井由美子	Zarit介護負担尺度日本語版の短縮版(J-ZBI_8)の開発について.	Gp net	50(11)	22-23	2004
荒井由美子, 工藤啓	Zarit介護負担尺度日本語版(J-ZBI)および短縮版(J-ZBI_8).	公衆衛生	68(2)	125-127	2004
熊本圭吾, 荒井由美子, 上田照子, 鷲尾昌一	日本語版Zarit介護負担尺度短縮版(J-ZBI_8)の交差妥当性の検討.	日本老年医学会雑誌	41(2)	204-210	2004